

氏名	山本 智子	(学籍番号 19DN02)	
学位の種類	博士(看護学)		
学位記番号	33号		
学位授与年月日	2024年9月18日		
論文題目	医療的ケアを必要とする重症心身障害児の母親の訪問看護師に対する 支援ニーズと訪問看護師による支援の研究		
論文審査担当者	委員長	酒井 昌子	教授
	委員	市江 和子	教授
	委員	宮谷 恵	教授
	委員	三輪真知子	教授
	委員	野田由佳里	教授

論文要旨

I. 研究の背景

わが国における新生児医療の進歩と共に、在宅療養をする医療的ケアを必要とする重症心身障害児（以下、在宅療養をする医療的ケア児とする）の数は年々増加傾向にある。訪問看護師は在宅療養をする医療的ケア児と母親を支える最も身近な存在であり、母親にとって利用しやすい社会資源となっている。在宅療養をする医療的ケア児と家族に対する訪問看護師による支援は、母親の養育生活での負担の軽減への期待が大きい。

II. 研究目的

本研究は、在宅療養をする医療的ケア児の母親の訪問看護師に対する支援ニーズ、および母親の支援ニーズに対する訪問看護師の看護実践を明らかにし、在宅療養をする医療的ケア児の母親の支援ニーズと訪問看護師の看護実践の一致と相違を検討し、訪問看護師の支援のあり方を明らかにする。

そのため、以下の目標を設定する。1. 在宅療養をする医療的ケア児の母親の訪問看護師に対する支援ニーズを質的調査によって明らかにする（第1研究）。2. 在宅療養をする医療的ケア児にかかわる訪問看護師に対して、看護実践を質的調査によって明らかにする（第1研究）。3. 全国において、在宅療養をする医療的ケア児にかかわる訪問看護師に対し、訪問看護事業所で提供する訪問看護師の支援の実践と重要性の認識を量的調査によって明らかにする（第2研究）。4. 第1,2研究によって明らかになった結果をふまえ、在宅療養をする医療的ケア児の母親の支援ニーズと、訪問看護師の支援の実践と重要性の認識の一致や相違を検討し、訪問看護師の支援のあり方を明らかにする。

III. 研究方法

1. 第1研究：質的記述的研究。在宅療養をする医療的ケア児の母親と在宅療養をする医療的ケア児にかかわる訪問看護師のそれぞれに半構造化面接をおこなった。

2. 第2研究：量的記述的研究として、在宅療養をする医療的ケア児にかかわる訪問看護師を対象に無記名自記式質問紙調査をおこなった。在宅療養をする医療的ケア児と母親、家族への支援においては、第1研究の母親の支援ニーズから38項目、訪問看護師の看護実践から6項目、母親の支援ニーズと訪問

看護師の看護実践にはないが、支援において必要であると考えた文献から抽出した3項目の47項目で構成した。実践と重要性の認識において記述統計量の算出と、支援項目ごとに実践と重要性の認識の関連の有無について χ^2 検定をおこなった。第1,2研究によって明らかになった結果をふまえ、在宅療養をする医療的ケア児の母親の支援ニーズと、訪問看護師の支援の実践と重要性の認識の一致や相違を検討し、訪問看護師の支援のあり方を明らかにした。

IV. 結果

1. 第1研究：在宅療養をする医療的ケア児の母親8名、訪問看護師10名の協力を得た。医療的ケア児の母親は訪問看護師に対し、【医療的ケア児の母親や家族の現状をふまえてかかわってほしい】支援ニーズを抱いていた。訪問看護師は専門職として先を見据え、『医療的ケア児の母親への支援を見極める』ことをしながら『医療的ケア児の母親のニーズをふまえて歩み寄り』看護実践をしていた。訪問看護師は、医療的ケア児の母親の支援ニーズを重視し看護実践をしていた。
2. 第2研究：全国の訪問看護事業所230カ所に対し、合計652名の訪問看護師に質問紙を配布し、143通の返送（回収率21.9%）があった。「在宅療養をする医療的ケア児の母親への支援」では、全支援項目において7割以上が「重要である」としていた。また、「在宅療養をする医療的ケア児の家族への支援」では、全支援項目において9割以上が「重要である」としていた。訪問看護師の実践と重要性の認識の関連において、9項目において有意差（ $P < 0.05$ ）がみられた。その中で、項目9「重症心身障害児の学校（園）において母親の代わりに待機をする」は最も低く、11.5%の実践であった。

V. 考察

1. 第1研究：訪問看護師は、在宅療養をする医療的ケア児の母親の支援ニーズに対し、専門性を活かし、自分の役割を認識したうえでの判断をおこない、看護実践をしていると考えられる。訪問看護師による看護実践は、医療的ケア児にかかわることから母親や家族、在宅療養生活全般に至る支援であり、母親の支援ニーズを重視し、母親や家族の成長を見据え、必要な支援を見極め、看護実践をしていることが考えられる。
2. 第2研究：訪問看護師による医療的ケア児の母親や家族への支援において、重要性の認識は高いと思われる。訪問看護師は母親や家族も支援の対象ととらえ、医療的ケア児を取り巻く家族の生活を支えることを大切にしていると考えられる。個々の家庭の状況に合わせて、必要なケアの支援をおこない、家庭内で調整ができる場所は見守る判断をし、ケアの主体は母親や家族ととらえていることが考えられる。
3. 全体考察：訪問看護師の支援のあり方として、支援ニーズと実際の支援に相違がないよう、母親の支援ニーズを的確にとらえ、寄り添うことが大切であると考えられる。必要に応じて多職種・他機関と連携を図り、医療的ケア児と地域が連携し、在宅療養をする医療的ケア児と家族が安心した生活を送ることができるよう支援することが重要と考えられる。

VI. 結論

訪問看護師による看護実践は、概ね母親の支援ニーズに沿い、訪問看護師が重要性を認識したうえでの看護実践であった。しかし、母親の支援ニーズに対応できていない支援がみられ、小児の在宅ケアの課題

が明らかになった。

訪問看護師は、在宅療養生活を送る医療的ケア児と母親や家族が利用できる「支援」を調整する役割を果たすことが示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、在宅療養をする医療的ケア児の母親の訪問看護師に対する支援ニーズ、および母親の支援ニーズに対する訪問看護師の看護実践を明らかにし、在宅療養をする医療的ケア児の母親の支援ニーズと訪問看護師の支援の一致と相違を検討し、訪問看護師の支援のあり方を明らかにすることである。第1研究として、在宅療養をする医療的ケア児の母親の訪問看護師に対する支援ニーズと訪問看護師の看護実践を質的調査によって明らかにした。第2研究では、第1研究により抽出された医療的ケア児の支援ニーズと看護実践を項目として、医療的ケア児の看護経験を有する訪問看護師に対して、訪問看護師の支援の実践と重要性の認識を量的調査によって明らかにした。さらに、第1,2研究の結果をふまえ、在宅療養をする医療的ケア児の母親の支援ニーズと訪問看護師の支援の実践と重要性の認識の一致と相違を分析し、医療的ケア児の訪問看護師の支援のあり方を明らかにした。本研究は、質的研究と量的研究の2つの研究方法によって、医療的ケア児の母親と訪問看護師の双方の視点から、支援ニーズと実践の相違とから在宅療養をする医療的ケア児の支援のあり方を検討したことが特長である。第1,2研究を通して、母親の訪問看護師への支援ニーズについて訪問看護師はその重要性を認識しており、大方、看護実践していたことが明らかになった。一方、重要性を認識しているが実践できていない外出支援や他家族との交流機会や児の学校（園）時の待機、家族の生活に合わせた柔軟な訪問は、児の成長発達や家族生活の安定充実において、重要で必要な支援であるが、現行の訪問看護サービスでは対応できない支援である。これらの支援ニーズに対応するために、訪問看護師は多職種・他機関との連携促進、医療的ケア児の健康と成長発達、家族の生活安定を支えるサービスの創設など地域・行政への働きかけが重要であることが示唆された。

今後としては、本研究の支援ニーズの結果を医療的ケア児に関連する訪問看護師や関連職種に提示し検証をすすめ、その上で実践的活用を具体化していくことの課題と展望を明らかにしており、研究の発展に期待が持てる。以上の結果から、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認められた。